親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析

落 合 良 行¹ 佐 藤 有 耕²

AN ANALYSIS ON THE PROCESS OF PSYCHOLOGICAL WEANING

Yoshiyuki OCHIAI AND Yuhkoh SATOH

The purpose of this study was to test the hypothesis on the process of psychological weaning. A questionnaire on parent-child relationship in adolescence was collected. There were 86 questions. This questionnaire was carried out among 540 students including junior-high school, high school, university and graduate-school students. As a result, the factor analysis presented that the parent-child relationship based on psychological weaning might be classified in six patterns. It was clarified that there were five steps in psychological weaning based on the parent-child relationship. Furthermore, it was found that in adolescence the parent-child relationship changed from the state of relationship toward a child protected by parents to the state of relationship with the child trusted and depended by their parents.

Key words : parent-child relation, psychological weaning, adolescence.

問 題

心理的離乳という概念は、Hollingworth (1928) によって提出された。しかし、この概念に関する実証的研究はほとんど行われてこなかった。それにもかかわらず、青年の心理を説明する際には、頻繁に言及される概念である。生理的離乳と対比的に言及されることからわかるように、従来、誰にでもみられる発達の現象として理解されてきた。最近では心理的離乳を一次、二次、三次という段階に分類する論文も出てきている（西平, 1990）。西平は、心理的離乳を、児童が青年となり、青年が成人になり、さらに自己実現を果たすために必要な心理的な発達過程ととらえている。このような論文が現れた中で、実証的に心理的離乳を説明しようとする研究も行われようとしている。落合（1995）は、心理的離乳への5段階過程仮説を提出している（TABLE 1）。落合の仮説は、文献（河合 1977, 西平・

TABLE 1 心理的離乳への5段階過程仮説

段階	親子関係	内容
5	対等な親子関係	子は子でありながら親になり、親は親でありながら子になる親子関係
4	手を切る親との関係	子との心理的距離を最も大きくとる、子と手を切る親との関係
3	成長を念じる親との関係	目の届かない遠くに行ってしまった子を信じ、成長を念じる親との関係
2	守る親との関係	子を目の届く範囲において、子を危険から守る親との関係
1	抱え込む親との関係	子を手の届く範囲において、子を抱え込み養う親との関係

久世 1988, 落合 1993, 山田 1983 など）研究と、青年が心理的離乳を果たしていく過程を分析した事例研究（落合, 1991）に基づいたものである。

この仮説は、親子関係を切り口として心理的離乳に至る過程を分析しようとするものである。とくに、親子間の心理的距離の大きさの変化に注目して、親子関係を5段階に分けている。この5段階の親子関係は、

¹ 筑波大学 (University of Tsukuba)

² 神戸大学 (Kobe University)

子どもの成長とともに順に変化していくと考えられている。「第1段階—抱え込む親との関係」は、親子間の心理的距離が、最も小さいと考えられる親子関係である。次に、「第2段階—守る親との関係」があり、「第3段階—成長を念じる親との関係」へと続く。子どもの成長につれて、親子間の距離は次第に大きくなっていく。そして、「第4段階—手を切る親との関係」で、親子間の距離は最大になる。ある程度成長した子と、親の意見が衝突した場合などを例にとることができるが、きわめて距離をおいた親子関係の状態である。最終段階は「第5段階—対等な親子関係」である。この段階は、心理的離乳を遂げた段階と考えられるが、子どもが単に親から離れた状態ではない。子が子でありながら、心理的に親と対等になった状態である。したがって、それまでの段階ではみられなかった、子が精神的、物理的に親を支えることも現れてくるのである。

この心理的離乳の過程に関する仮説は、論究や個別的な青年の事例に基づいて導かれたものである。このような仮説が、多くの青年にも適用できるかどうかを確かめることには意義があろう。そして、心理的離乳に至る過程が、実証的に解明されれば、青年自身が自分の発達段階を知ることができ、親子関係からみた自己理解に貢献することができると考えられる。

本研究は、上記の心理的離乳への5段階過程仮説(以下、5段階仮説と略す)を検討することを手がかりにして研究をすすめる。そして、青年がどのような親子関係にあるか、すなわち、青年期における親子関係のあり方を分析し、親子関係の発達の变化を解明しようとするものである。具体的には、以下の3点の検討が目的とされた。(1)心理的離乳への過程が、仮説に示された5段階に対応した親子関係から構成されているかどうかを検討する。(2)心理的離乳への過程でみられる親子関係について、年齢の変化を指標とした発達の变化を解明する。(3)青年期の各時期に特徴的にみられる親子関係の変化を手がかりにして、青年期における心理的離乳への過程を明らかにする。

方 法

〈親子関係項目の収集〉 項目収集は、次の2つの方法で行われた。①大学生に、20答法形式の文章完成法による調査を行い、自分の今までの親子関係に関する記述を求めた。②仮説を導くに至った文献と事例研究にみられた親子関係を抜き出した。このようにして収集された項目を、項目内容の類似などの点から整理し選定した。その結果、86項目に整理された。この86項

目は5段階仮説を手がかりにして分類された。

〈質問紙の構成〉 第1段階—子を抱え込む親との関係14項目(項目の記号:H)。第2段階—a)子を守る親との関係13項目、b)子を危険や害から守る親との関係13項目(この段階の内容は、項目選定の中で2つのサブカテゴリーがあったので、両者の項目を入れた。両者とも項目の記号:I)。第3段階—子の成長を念じる親との関係15項目(項目の記号:A)。第4段階—子と手を切る親との関係13項目(項目の記号:C)。第5段階—対等な親子関係19項目(項目の記号:Z)。これらの項目を使って、父親との関係、母親との関係、各86項目からなる質問紙が作成された。回答は、各質問項目が自分の親子関係にあてはまる程度について、5件法で求められた。

〈調査対象〉 分析に用いられた調査対象者は、中学1—3年生152(M70, F82)名、高校1—2年生171(M84, F87)名、大学生196(M97, F99)名、大学院生21(M10, F11)名、合計540(M261, F279)名。平均年齢は中学生13.80($SD=0.98$)才、高校生16.27($SD=0.64$)才、大学生20.38($SD=1.47$)才、大学院生25.19($SD=3.96$)才であった。

〈分析手続〉 (1)回答者全体のデータ行列を因子分析した。母親との関係を表わす項目(以下母親項目と略す)、父親との関係を表わす項目(以下父親項目と略す)のそれぞれについて、共通性を反復推定し主因子法による初期解を求めた。(2)得られた固有値の推移から、母親項目については因子数10から、父親項目については因子数9から順次因子数を減らしてPromax解を求めた。因子の解釈から、どちらのデータについても、6因子解を最適解として採用した。(3)両者の因子パターンを比較したところ、ほぼ同じ内容の因子が抽出されたと判断できた。そこで、どちらの因子パターンにも因子負荷が.40に満たなかった5項目を削除した。残った81項目について、それぞれ再度因子分析を行った。その結果、両者とも、6因子解が最適解とされた。(4)この6因子について、因子得点を回帰推定法によって求めた。(5)推定された因子得点を用い、学校段階の要因と性別の要因、そして個人内の6種類の親子関係の要因を考慮した3要因の分散分析を行った。多重比較を行う際には、LSD法(5%水準)を用いた。なお、分析に用いた統計パッケージは、SAS-ver.6.07, STAR-ver.4.0(田中, 1992)であった。

結果と考察

1. 青年期における親子関係のあり方の分析
 - a. 母子関係からみた親子関係の分析

81個の母親項目を因子分析し、6因子が抽出された(寄与率39.26%)。因子パターンをTABLE 2に示した。各因子は以下のように解釈された。

第1因子に高い負荷を示した項目の多くは、項目作成の際に参照した仮説の「第3段階—子の成長を念じる親との関係の項目」と「第5段階—対等な親子関係(そのうちの親が一人前の人間として自分を認めてくれるとい

う内容の項目)」,この2つの段階の項目であった。この因子の代表項目として、負荷量の上位3項目をあげると、次のようである。「母親は、子どものことを信じているのであまり口うるさくない(.70)」,「母親は、私のことを精神的に大人になったと認めている(.68)」,「母親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押しつけることはない(.61)」。子どもが母親から信頼され、一人前の

TABLE 2 母子関係からみた親子関係81項目のプロマックス回転後の因子パターン行列

No.	項 目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h ²
A09	母親は、子どものことを信じているのであまり口うるさくない。	70	01	19	-03	00	-28	54
Z05	母親は、私のことを精神的に大人になったと認めている。	68	-15	11	08	-06	03	47
A13	母親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押しつけることはない。	61	19	08	-09	-03	-38	46
Z06	母親は、私を一人の人間として認めている。	60	-03	02	-06	07	-08	41
A12	母親は、干渉はしないが、いつも私のことを気にかけている。	60	08	-15	03	-15	-01	37
A01	母親は、私を信頼してくれている。	60	-08	-16	09	00	-01	56
Z02	母親は、私がおとなであることを認めてくれている。	59	-25	04	04	-02	-08	51
Z12	母親も私も、それぞれの立場を互いに理解しようとしている。	59	05	00	14	07	-07	52
A02	母親は、私のすることにはめったに反対しない。	58	03	23	-03	-04	-15	30
A04	母親は、私が自分の考えで行動しても認めてくれる。	58	-07	09	-02	06	-20	45
A03	母親は、陰から私をそっと見守っている。	54	01	-02	02	08	19	37
A06	母親は、お前を信じているからやってみろと言ってくれる。	51	01	03	11	09	02	38
Z11	母親とは、お互いに個人として尊敬しあう仲である。	51	10	-02	28	00	-09	51
A10	母親は、私のプライバシーを尊重してくれる。	50	08	-01	03	04	-35	46
Z04	母親は、私がしてあげることが素直に喜んでくれる。	47	05	-21	01	09	09	40
A08	母親は、子の幸せは母親の幸せだと言って、私を見守ってくれている。	45	00	-16	09	13	26	47
H02	母親は、私の進路について母親の考えで決めようとする。	-42	-04	12	10	10	35	35
H05	母親は、私の将来の道を決めてしまう。	-42	-03	22	25	09	34	38
A11	母親は、私が友人とうまくやっていると信じてくれている。	38	03	-13	-05	-01	11	16
Z10	母親は、私を自分たちと同等に扱ってくれる。	36	16	-05	12	02	-24	29
H14	母親は、私の夜の外出を許可してくれない。	-20	75	-06	03	-16	-05	59
I14	母親は、私に夜一人で外出させないようにしている。	-18	73	-23	20	-15	-05	56
I10	母親は、私が盛り場やゲームセンターに行くことを禁止している。	-01	68	-05	-05	-10	09	50
I11	私が夜外出するときには、母親がついて来ることが多い。	00	66	-05	11	-01	-07	41
I04	母親は、私が酒やタバコには近づかないようにしている。	10	56	-08	-29	-04	10	40
I15	母親は、私が夜遅く帰るときは迎えにきてくれる。	-13	55	-05	26	15	-18	40
I22	私への危ない誘いは、母親が断ってくれる。	12	54	12	-17	20	04	40
I06	母親は、私が異性と二人きりになることは許さない。	-11	49	01	06	-07	10	32
I12	母親は、私が変な雑誌を買ってくると取り上げる。	06	47	18	-06	-05	06	27
I19	母親は、私の帰りが遅くなったときには迎えにきてくれる。	-11	46	-05	31	15	-17	35
I07	母親は、悪い誘惑から私を守ってくれる。	15	44	-03	-11	28	18	46
I17	母親は、急に雨になった日には私のために傘をもってきてくれる。	11	44	03	15	01	-15	19
I02	母親が有害であると判断したテレビなどは、私には見せないようにしている。	05	43	12	-02	05	08	24
H09	母親は、門限を厳しくして私を管理しようとしている。	-21	42	12	06	00	18	40
I20	母親は、私が夜自転車などに乗るときにはライト(電灯)をつけるようにと注意する。	05	39	-15	-06	00	05	19
I13	母親は、恐いことがあるといつもそばにいて守ってくれる。	16	37	11	03	38	05	43
I08	母親は私に、不良っぽい人とはつきあうなと言っている。	05	34	-12	-17	-01	30	31
I05	母親は、悪い友人から私を守ってくれる。	18	24	-01	05	18	21	27

Z01	母親とは対等なので言いたいことが言える。	20	-19	-05	11	13	-06	21
C10	母親は、私をほったらかしにしている。	-01	-11	63	00	-04	-11	45
C04	母親は、「勝手に生えればよい」と言って私の世話はしてくれない。	07	-09	63	10	-06	00	36
C01	母親は、私が何をしてもお構いなしである。	26	-17	59	06	02	-10	34
C02	母親は、私の進路について全然関心がないようだ。	04	11	58	09	-09	-09	33
C05	母親は、子どものことについて責任を取る必要はないと言っている。	03	07	57	03	-01	-03	31
C08	母親は、私に家に帰ってこなくてもいいと言う。	-14	-16	52	08	10	08	29
C03	母親は、私にあまり関心をもっていない。	-28	14	50	-12	05	-12	52
C11	母親は、私が学校のことで困っていても相談にのってくれない。	07	13	50	-06	-31	16	51
C06	母親は、私とほとんど話をしようとししない。	-12	07	50	-10	01	04	39
C09	母親は、私を嫌っているように思える。	-37	07	49	-01	13	08	50
C07	母親は、私が困っているときでも助けてくれない。	-04	13	31	-11	-34	05	41
H08	母親は、自分のまねをしていれば間違いないと私に言っている。	02	25	28	-01	13	28	30
I24	母親は私が危険な目にあわないように気をつけている。	28	23	-27	02	09	18	36
Z03	母親は、私に相談を持ちかけてくることがある。	-08	-01	11	78	03	03	54
Z13	母親は、私に愚痴(ぐち)を聞いてもらうことがある。	-19	-05	-09	55	06	03	29
Z07	母親は、私に精神的な面で頼ることがある。	28	12	17	55	-06	10	43
Z09	母親は、私から精神的に支えられることもある。	17	-07	14	53	15	16	48
Z19	母親は、私に話し相手になってほしいと思っている。	12	-05	-06	53	00	14	40
Z18	母親は、迷ったときには、私の考えを参考にしようとする。	10	11	06	51	07	-01	35
Z16	母親は、私をあてにしている。	16	-06	-03	47	-27	29	28
Z14	母親は、私を頼りにしている。	36	-01	01	45	-19	10	35
Z17	母親は、わからないことがあると私に聞いてくる。	15	00	03	39	-01	05	22
Z15	母親の後ろ姿を見て、いとおしさをおぼえることがある。	29	12	-04	31	-01	12	30
I21	母親は、私が学校のことで困ったときにはいろいろ教えてくれる。	-05	12	04	01	79	01	64
A15	母親は、私が友人のことで困っていると、自分で解決できるように励ましてくれる。	00	-08	-02	07	72	01	56
A14	母親は、私が学校のことで困っていると、自分で解決できるように励ましてくれる。	10	-13	-04	02	67	05	54
I25	母親は、私が友人のことで困ったときにはいろいろ教えてくれる。	-04	09	03	21	63	-04	56
I03	私が困ったときに、母親はいろいろと助けてくれる。	19	-03	-06	00	62	10	58
I01	母親は、私が進路のことで失敗ないようにアドバイスをくれる。	-06	05	-20	-16	54	13	36
I23	母親は、私が勉強のことで困ったときにはいろいろ教えてくれる。	04	31	08	-26	54	-04	39
C12	母親は、私が勉強のことで困っていても相談にのってくれない。	10	-05	28	05	-46	18	34
C13	母親は、私が友人のことで困っていても相談にのってくれない。	09	09	23	-16	-45	24	45
H03	母親は、私が解決できないことをすぐ解決してくれる。	16	37	15	-07	43	01	42
A05	私が困ったときに、母親は心の支えになってくれる。	38	01	-09	08	40	06	61
H10	母親は、私のことは何でも知っていたいと思っている。	07	09	-13	09	-03	54	36
H12	母親は、私のことには何でも口を出してくる。	-27	15	-02	02	00	51	49
H11	母親は、私の交友関係を全部知っていたいと思っている。	-06	05	-02	05	04	49	28
H07	母親は、私がやるべきことについて手を出したがる。	-26	-06	-05	11	05	43	25
H13	母親は、子どもというものは手をかけるほどうまく成長すると思っているようだ。	-01	10	01	08	-07	40	21
H01	母親は、私が母親の言うことを聞くべきだと考えている。	-09	16	-08	-16	01	40	30
H06	母親は、私を手放そうとししない。	-13	18	05	23	01	39	33
H04	母親は、自分ができなかったことや夢を私に託そうとする。	-04	-11	02	25	03	36	17

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F2	-18				
F3	-43	02			
F4	51	-01	-36		
F5	56	29	-42	51	
F6	-23	46	08	00	08

人間として認められるようになることは、青年期にみられる母子関係の面での大きな変化といえる。第1因子は「子が親から信頼・承認されている親子関係」の因子と命名された（以下図表では「(I)信頼承認」と略す）。

第2因子に高い負荷を示した項目のほとんどは、「第2段階－b)子を危険や害から守る親との関係」の項目であった。この因子の代表項目として、負荷量の高い2項目をあげると次のようになる。「母親は、私の夜の外出を許可してくれない(.75)」、「母親は、私が盛り場やゲームセンターに行くことを禁止している(.68)」。この因子に高い負荷量を示した項目に表現されている危険や害とは、外的で直接的なものである。このことから、第2因子は、外界にある危険から親が子どもを守るという親子関係を表わす因子と解釈され、「親が子を危険から守る親子関係」の因子と命名された（以下図表では「(P)危険から守る」と略す）。

第3因子に.40以上の負荷量を示した項目は、すべて、「第4段階－子と手を切る親との関係」の項目であった。この因子の代表項目は、次のような項目である。「母親は、『勝手に生きればよい』と言って私の世話はしてくれない(.63)」、「母親は、子どものことについて責任を取る必要はないと言っている(.57)」。この第3因子は「親が子と手を切る親子関係」の因子と命名された（以下図表では「(C)手を切る」と略す）。

第4因子に.40以上の負荷量を示した項目は、すべて、「第5段階－対等な親子関係」の項目であった。この因子の代表項目は、次のような項目である。「母親は、私に相談を持ちかけてくることがある(.78)」、「母親は、私に精神的な面で頼ることがある(.55)」。これは、親が子を頼りにし、子が親を支えることもあるという母子関係を表わす因子と解釈される。第4因子は「親が子を頼りにする親子関係」の因子と命名された（以下図表では「(R)頼りにする」と略す）。

第5因子に.40以上の負荷量を示した項目は、「第2段階－a)子を守る親との関係」、「第3段階－子の成長を念じる親との関係」、マイナスの負荷を示す逆転した項目として「第4段階－子と手を切る親との親子関係」の項目であった。このように、いろいろな段階の親子関係の項目が入っていた。しかし、その項目の内容には、「子どもである青年が困ったとき助けてくれる、教えてくれる、励ましてくれる」といった一貫性がみられる。負荷量の高い中から、代表的な項目として次の3項目をあげておく。「母親は、私が学校のことで困ったときにはいろいろ教えてくれる(.79)」、「母親は、私が友人のことで困っていると、自分で解決できるよう

に励ましてくれる(.72)」、「私が困ったときに、母親はいろいろと助けてくれる(.62)」。以上のことから、第5因子は、子どもである青年が困ったときに、母親が助けたり、励まし子どもを支える親子関係を表わすと解釈された。これを受けて、「子が困った時には親が支援する親子関係」の因子と命名された（以下図表では「(S)困難時の支援」と略す）。

第6因子に.40以上の負荷量を示した項目は、すべて、「第1段階－子を抱え込む親との関係」の項目であった。そのうちの代表項目として、次の2項目をあげておく。「母親は、私のことは何でも知っていたいと思っている(.54)」、「母親は、私のことには何でも口を出してくる(.51)」。この第6因子は「親が子を抱え込む親子関係」の因子と命名された（以下図表では「(B)抱え込む」と略す）。

b. 父子関係からみた親子関係の分析

81個の父親項目を因子分析し、6因子が抽出された（寄与率42.20%）。因子パターンをTABLE 3に示した。ただし、項目文は、「母親」が「父親」となった以外は母親項目と同一であるので、省略した。各因子は以下のように解釈された。

第1因子の解釈は、母親項目の第1因子と同様になった。代表項目をあげると、次のようになる。「父親は、私がおとなであることを認めてくれている(.76)」、「父親は、私が自分の考えで行動しても認めてくれる(.75)」。第1因子は、「子が親から信頼・承認されている親子関係」の因子と命名された。

第2因子の解釈も、母子関係の第2因子と同様になった。代表項目として次の2項目をあげておく。「父親は、私に夜一人で外出させないようにしている(.74)」、「父親は、私が異性と二人きりになることは許さない(.67)」。第2因子は、「親が子を危険から守る親子関係」の因子と命名された。

第3因子の解釈も、母子関係の第3因子と同様になった。この因子の代表項目は、「父親は、私をほったらかしにしている(.74)」、「父親は、私を嫌っているように思える(.61)」などである。第3因子は「親が子と手を切る親子関係」の因子と命名された。

第4因子の解釈は、母子関係の第5因子と同様になった。代表的な項目として、次の2つをあげておく。「父親は、私が学校のことで困ったときにはいろいろ教えてくれる(.70)」、「私が困ったときに、父親は心の支えになってくれる(.59)」。以上のことから、第4因子は「子が困った時には親が支援する親子関係」の因子と命名された。

TABLE 3 父子関係からみた親子関係81項目のプロ
マックス回転後の因子パターン行列

No.	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h ²
Z 02	76	-20	12	-05	03	-03	50
A 04	75	-01	-03	-05	-10	-05	55
Z 05	74	-16	15	-05	05	04	48
Z 06	74	-07	03	05	02	-05	54
A 10	65	08	04	07	-16	-04	47
A 09	65	06	11	05	-31	-07	50
Z 12	64	-03	-03	17	01	02	60
A 01	63	-08	-11	06	-02	-03	53
Z 11	63	02	08	12	-01	14	54
A 02	62	06	29	-03	-12	-01	29
A 11	61	09	-15	-04	14	-20	38
A 12	55	-03	-18	08	19	-09	46
A 06	54	-03	-10	11	08	00	44
Z 10	53	-02	10	06	-12	11	36
Z 04	50	09	-22	05	04	-01	46
A 03	49	08	-06	07	06	00	32
A 13	46	10	10	12	-37	01	39
A 08	42	10	-23	19	13	-03	51
Z 01	40	-04	-02	-06	-08	20	25
I 14	04	74	-09	-12	07	-09	53
I 10	-09	68	04	03	05	-11	51
I 06	01	67	09	-08	12	-10	48
H 14	-07	66	00	-10	08	-04	46
I 15	16	58	-21	-18	-23	26	41
I 19	17	56	-24	-23	-21	28	41
I 04	-18	55	01	21	-15	-05	35
I 08	-04	53	-11	04	17	-06	42
I 22	-09	51	07	40	-08	03	48
H 09	-02	51	07	-12	23	04	41
I 07	06	48	02	40	-01	-07	49
I 02	-04	46	15	15	11	00	34
I 11	-02	41	14	08	05	22	33
I 20	01	40	-22	04	04	02	27
I 12	-10	37	29	19	09	05	33
I 24	23	33	-29	17	13	-05	49
C 10	18	-14	74	-11	03	-03	56
C 04	07	-04	71	04	-04	-03	44
C 03	-15	12	66	00	-05	04	56
C 09	-21	12	61	17	06	-01	49
C 01	30	-06	60	-19	-05	09	37
C 06	00	11	60	-08	05	-12	44
C 05	04	-03	59	06	09	07	31
C 08	01	-13	54	10	11	09	27
C 02	-05	14	50	-08	-17	12	32
C 11	17	11	47	-46	16	-09	51
C 07	-07	08	46	-23	14	-02	44

I 21	06	10	-04	70	03	04	67
A 15	16	04	03	66	-07	08	63
A 14	15	-02	-01	63	00	09	59
A 05	26	-10	00	59	01	05	58
I 25	-05	-01	-01	57	05	20	45
I 13	05	30	06	56	01	00	53
C 13	09	13	20	-56	20	-04	38
I 01	11	-03	-11	51	24	-10	43
I 23	02	14	-04	50	04	-03	35
H 03	17	10	12	48	07	-04	33
I 03	25	-04	-15	47	03	-01	54
C 12	05	00	37	-44	02	11	40
I 05	07	39	03	42	06	-05	46
Z 15	21	-01	-01	26	05	22	33
H 12	-17	08	-08	-10	59	08	46
H 04	08	-12	06	16	52	00	27
H 07	-17	02	-11	-07	52	14	35
H 05	-04	05	13	-07	51	03	33
H 01	06	18	03	-05	51	-12	32
H 08	00	06	22	15	50	04	38
H 10	02	02	-11	06	49	09	33
H 11	-06	04	-04	09	48	13	35
H 02	-11	06	14	-01	48	-04	32
H 06	-03	28	-08	-01	38	04	35
H 13	06	15	05	02	36	09	22
Z 19	19	-11	-20	05	24	22	30
Z 03	-13	-11	07	09	03	77	55
Z 07	-11	-03	00	12	05	65	45
Z 13	-13	-03	05	06	08	61	37
Z 17	09	01	05	01	-02	57	37
Z 18	07	02	13	15	04	54	43
Z 09	08	03	02	10	02	51	39
Z 16	18	-06	-03	-23	21	48	31
I 17	03	26	00	02	-04	41	30
Z 14	37	-04	-04	-17	19	39	36

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F2	-05				
F3	-52	-05			
F4	55	35	-47		
F5	-13	46	01	19	
F6	44	27	-12	46	27

第5因子の解釈は、母子関係の第6因子と同様になった。高い負荷量をもつ2項目を、代表項目として次にあげておく。「父親は、私のことには何でも口を出してくる(.59)」、「父親は、自分ができなかったことや夢を私に託そうとする(.52)」。第5因子は「親が子を抱え込む親子関係」の因子と命名された。

第6因子の解釈は、母子関係の第4因子と同様になった。その代表項目として、2項目あげると次のようである。「父親は、私に相談を持ちかけてくることがある(.77)」、「父親は、私に精神的な面で頼ることがある(.65)」。第6因子は「親が子を頼りにする親子関係」の因子と命名された。

c. 両親との関係からみた親子関係のあり方の分類

母子関係と父子関係とでは、因子の抽出順が異なっただけで、分析結果は内容的にほぼ同じであった。このことから、青年期の親子関係のあり方は、母子関係、父子関係ともに同じ内容の6種類に分類できるといえる。

この6種類の親子関係の内容は、先に示した心理的離乳への5段階仮説に示されていた親子関係とほぼ対応していた。しかし、仮説では5種類の親子関係がみられると考えていたが、実際には6種類であることが明らかになった。そこで、以下の分析では、6種類の親子関係の順序性について検討するために、親子関係の変化を分析していくことにする。なお、分析の順番は因子の抽出順ではなく、5段階過程仮説で予想していた順序に対応させて行った。

2. 年齢を指標とした親子関係の発達的变化の検討

a. 母子関係からみた親子関係の発達的变化

母子関係に関する4つの学校段階別の因子得点は、男子、女子、全体に分けてTABLE 4に示した。3要因の分散分析³の結果、交互作用に関しては、学校段階×親子関係 ($F(15,2660)=16.93, p<.01$)、性別×親子関係 ($F(5,2660)=13.99, p<.01$) の2つの1次交互作用に有意差がみられた。これら2つ以外に有意差のある交互作用はなかった。以後、各要因の水準別に単純主効果を分析した結果について述べる。

母子関係の①「親が子を抱え込む親子関係」については、学校段階の主効果に有意差がみられた ($F(3,532)=4.86, p<.01$)。性別の主効果には有意差はみられなかった。学校段階間の差を多重比較 ($Mse=0.79$) した結果をまとめると、中学生群>高校生群=大学生群=院生群となった。

母子関係の②「親が子を危険から守る親子関係」については、学校段階の主効果に有意差がみられ ($F(3,532)=47.57, p<.01$)、性別の主効果にも有意差がみ

TABLE 4 学校段階別にみた6種類の母子関係の因子得点

		中学生	高校生	大学生	院 生
(A)親が子を抱え込む関係	男子	0.24(0.69)	0.03(0.96)	-0.30(0.94)	-0.11(0.96)
	女子	0.46(0.89)	-0.08(0.87)	-0.21(0.84)	0.15(1.27)
	全体	0.36(0.81)	-0.03(0.92)	-0.25(0.89)	0.03(1.11)
(B)親が子を危険から守る関係	男子	0.66(0.65)	-0.20(0.80)	-0.88(0.70)	-0.70(0.53)
	女子	0.92(0.75)	0.29(0.75)	-0.34(0.74)	-0.39(1.05)
	全体	0.80(0.72)	0.05(0.81)	-0.61(0.76)	-0.54(0.84)
(C)子が困った時には親が支援する関係	男子	0.03(0.78)	-0.65(0.93)	-0.15(0.84)	-0.20(0.82)
	女子	0.33(1.13)	0.00(0.85)	0.43(0.82)	-0.08(1.01)
	全体	0.19(0.99)	-0.32(0.95)	0.14(0.87)	-0.14(0.90)
(D)親が子と手を切る関係	男子	0.36(0.98)	0.25(0.89)	-0.07(0.83)	0.51(0.92)
	女子	0.07(0.98)	-0.06(0.96)	-0.41(0.85)	-0.44(0.62)
	全体	0.20(0.99)	0.09(0.94)	-0.24(0.85)	0.01(0.90)
(E)子が親から信頼・承認されている関係	男子	-0.33(0.85)	-0.48(0.89)	0.41(0.80)	0.61(0.82)
	女子	-0.31(1.04)	-0.17(0.87)	0.55(0.84)	0.33(1.07)
	全体	-0.32(0.95)	-0.32(0.89)	0.48(0.82)	0.46(0.95)
(F)親が子を頼りにする関係	男子	-0.47(0.66)	-0.67(0.82)	0.02(0.75)	0.31(0.74)
	女子	-0.10(1.04)	0.08(0.82)	0.74(0.73)	1.06(0.73)
	全体	-0.27(0.90)	-0.29(0.90)	0.38(0.82)	0.70(0.82)

数値は因子得点の平均値、()は標準偏差

られた ($F(1,532)=18.01, p<.01$)。男女間では女子の方が得点が高かった。学校段階間の差を多重比較 ($Mse=0.54$) した結果をまとめると、中学生群>高校生群>大学生群=院生群となった。

母子関係の③「子が困った時には親が支援する親子関係」については、学校段階の主効果に有意差がみられ ($F(3,532)=4.31, p<.01$)、性別の主効果にも有意差がみられた ($F(1,532)=12.74, p<.01$)。男女間では女子の方が得点が高かった。学校段階間の差を多重比較 ($Mse=0.81$) した結果は、中学生群=大学生群>高校生群となった。院生群は、高校生群の次に得点が低かった。しかし、どの学校段階との間にも有意差はみられなかった。高校生は、他の学校段階の者より、困難な事態に陥った時、母親は自分のそばにいて助けたり、励ましたりしてくれるとは思っていないといえる。これは、高校生の母子関係にみられる特徴といえよう。

母子関係の④「親が子と手を切る親子関係」については、学校段階の主効果 ($F(3,532)=2.69, p<.05$) と、性別の主効果に有意差がみられた ($F(1,532)=16.78, p<.01$)。男女間では男子の方が得点が高かった。学校段階間の差を多重比較 ($Mse=0.82$) した結果をまとめると、中学生

³ 学校段階間の比較では、中学生群、高校生群、大学生群、院生群の4群で比較した。院生の人数は他の3つに比較して少なかった。しかし、発達差を検討するためには年齢の高い青年層が不可欠であったため、そのまま院生群として検討に含めた。

群＝高校生群>大学生群となった。院生群は、大学生群の次に得点が低かった。しかし、どの学校段階との間にも有意差はみられなかった。年齢が低いほど、自分の母親との関係は、親が子どもと手を切り、離れようとしている関係だと感じているといえよう。特に中学生は、母親との関係を「親が子を抱え込む親子関係」「親が子を危険から守る親子関係」であると思っている。それにもかかわらず、中学生は、大学生と比べて、自分の母親との関係は「親が子と手を切る親子関係」だと思っている点は注目に値する。

母子関係の⑤「子が親から信頼・承認されている親子関係」については、学校段階の主効果にのみ有意差がみられ($F(3,532)=16.56, p<.01$)、性別の主効果には有意差はみられなかった。学校段階間の差を多重比較($Mse=0.78$)した結果をまとめると、院生群＝大学生群>高校生群＝中学生群となった。

母子関係の⑥「親が子を頼りにする親子関係」については、学校段階の主効果($F(3,532)=22.44, p<.01$)と、性別の主効果に有意差がみられた($F(1,532)=39.08, p<.01$)。男女間では女子の方が得点が高かった。学校段階間の差を多重比較($Mse=0.66$)した結果をまとめると、院生群>大学生群>高校生群＝中学生群となった。このことから、「親が子を頼りにする親子関係」は、子どもが大学生以上になって、急に増えるといつてよいであろう。

b. 父子関係からみた親子関係の発達的变化

父子関係についても、母子関係と同様に、4つの学校段階別の因子得点をTABLE 5に示した。3要因の分散分析の結果、交互作用に関しては、学校段階×親子関係($F(15,2660)=9.46, p<.01$)、性別×親子関係($F(5,2660)=7.62, p<.01$)の2つの1次交互作用に有意差がみられた。これら2つ以外に有意差のある交互作用はなかった。以後、各要因の水準別に単純主効果を分析した結果について述べる。

父子関係の①「親が子を抱え込む親子関係」については、学校段階の主効果にも、性別の主効果にも有意差はみられなかった。

父子関係の②「親が子を危険から守る親子関係」については、学校段階の主効果に有意差がみられ($F(3,532)=25.98, p<.01$)、性別の主効果にも有意差がみられた($F(1,532)=30.45, p<.01$)。男女間では女子の方が得点が高かった。学校段階間の差を多重比較($Mse=0.63$)した結果をまとめると、中学生群>高校生群>大学生群＝院生群となった。

父子関係の③「子が困った時には親が支援する親子

TABLE 5 学校段階別にみた6種類の父子関係の因子得点

		中学生	高校生	大学生	院 生
(A)親が子を抱え込む関係	男子	0.22(0.74)	0.08(0.99)	-0.38(0.92)	0.28(0.99)
	女子	0.15(0.88)	0.03(0.89)	-0.02(0.98)	-0.08(1.00)
	全体	0.18(0.82)	0.05(0.94)	-0.20(0.96)	0.09(0.99)
(B)親が子を危険から守る関係	男子	0.43(0.62)	-0.17(0.88)	-0.90(0.75)	-0.81(0.64)
	女子	0.73(0.84)	0.33(0.73)	-0.07(0.84)	-0.19(1.29)
	全体	0.59(0.76)	0.09(0.84)	-0.48(0.90)	-0.48(1.06)
(S)子が困った時には親が支援する関係	男子	0.27(0.87)	-0.32(0.96)	-0.09(1.00)	-0.14(0.78)
	女子	0.18(1.06)	-0.14(0.82)	0.14(0.95)	0.18(0.91)
	全体	0.22(0.97)	-0.23(0.90)	0.03(0.98)	0.03(0.84)
(C)親が子と手を切る関係	男子	0.22(0.96)	0.24(0.92)	-0.04(0.87)	0.05(0.96)
	女子	0.10(0.99)	0.10(0.92)	-0.43(0.94)	-0.53(0.62)
	全体	0.15(0.97)	0.17(0.92)	-0.24(0.93)	-0.25(0.83)
(T)子が親から信頼・承認されている関係	男子	-0.26(0.92)	-0.49(0.91)	0.42(0.90)	0.43(0.79)
	女子	-0.19(0.97)	-0.14(0.85)	0.37(0.94)	0.53(0.89)
	全体	-0.22(0.95)	-0.31(0.90)	0.39(0.91)	0.49(0.82)
(R)親が子を頼りにする関係	男子	0.19(0.91)	-0.23(0.91)	0.00(0.90)	0.74(0.92)
	女子	0.01(1.10)	-0.06(0.87)	0.00(0.85)	0.25(1.07)
	全体	0.09(1.02)	-0.14(0.89)	0.00(0.87)	0.48(1.01)

数値は因子得点の平均値、()は標準偏差

関係」については、学校段階の主効果にも、性別の主効果にも有意差はみられなかった。

父子関係の④「親が子と手を切る親子関係」については、学校段階の主効果に有意差がみられ($F(3,532)=3.88, p<.05$)、性別の主効果にも有意差がみられた($F(1,532)=6.71, p<.05$)。男女間では男子の方が得点が高かった。学校段階間の差を多重比較($Mse=0.86$)した結果をまとめると、中学生群＝高校生群>大学生群＝院生群となった。

父子関係の⑤「子が親から信頼・承認されている親子関係」については、学校段階の主効果にのみ有意差がみられた($F(3,532)=12.61, p<.01$)。性別の主効果には有意差はみられなかった。学校段階間の差を多重比較($Mse=0.83$)した結果をまとめると、院生群＝大学生群>高校生群＝中学生群となった。この親子関係は、大学生以上で急増する父子関係といえることができるであろう。

父子関係の⑥「親が子を頼りにする親子関係」については、学校段階の主効果にのみ有意差がみられた($F(3,532)=5.31, p<.01$)。性別の主効果には有意差はなかった。学校段階間の差を多重比較($Mse=0.86$)した結果をまとめると、院生群>大学生群＝高校生群＝中学生

群となった。

c. 両親との関係からみた親子関係の発達的变化

母子関係、父子関係に関する因子得点の変化の様態は、ほぼ同じであった。したがって、親子関係の変化過程は、母子・父子関係どちらの場合もほぼ同様と考えられる。

心理的離乳への過程でみられる親子関係について、発達的变化を検討した結果、次のような注目すべき点が見出された。親子関係の中で最も親子間の距離が小さいのは、「親が子を抱え込む親子関係」である。これと対照的に、最も距離が大きいのが「親が子と手を切る親子関係」である。その点では、これら2つは、相反する関係といえる。しかし、今回の研究では、「親が子を抱え込む親子関係」も、「親が子と手を切る親子関係」もともに、中学生や高校生でより多くみられた。先行研究(落合, 1995)で、親子関係はダイナミックなものであり、相反する親子関係が、同時に存在する場合もあると指摘されていた。この知見をいれるならば、この現象は次のように考えられよう。

親と密接な関係にある「親が子を抱え込む親子関係」では、親の意に適っている時には、親は子どもの欲求を何でも満たしてくれる存在である。ところが、何かのきっかけでそうでないと感じることがあると、中・高校生の場合には、極端に反対の感じを抱くことがある。つまり、自分の親は、冷たく、めんどろをみてくれないと感じるのである。そして、自分の親子関係は、「親が子と手を切る親子関係」だと感じたり考えたりするのではないだろうか。つまり、これら2つの親子関係は、アンビヴァレントでダイナミックな形で現れやすい親子関係と考えることができよう。

3. 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の検討

a. 青年期の各時期にみられる母子関係の特徴

母親との親子関係について、1.ですすでに解明された6因子の各因子得点の変化を、学校段階別にまとめて図示したものがFIGURE 1である。以下、6種類の親子関係の得点の比較を学校段階別に行った。

中学生群では、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた($F(5,2660)=15.68, p<.01$)。多重比較($Mse=0.67$)の結果をまとめると、 $P>H=S=C>T=R$ となった。すなわち、まず中学生の母子関係の特徴は、第2段階「親が子を危険から守る親子関係(P)」が顕著に現れる。また、第1段階「親が子を抱え込む親子関係(H)」、第3段階「子が困った時には親が支援する親子関係(S)」、第4段階「親が子と手を切る親子関係(C)」の3つも、第5

FIGURE 1 学校段階間にみられる母子関係の因子得点の変化

段階「子が親から信頼・承認されている親子関係(T)」、第6段階「親が子を頼りにする親子関係(R)」に比べると得点が高い。

高校生群でも、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた($F(5,2660)=3.52, p<.01$)。多重比較した結果をまとめると、 $P=C>S=T=R, H>S=T, H=R, P=H=C$ となる。つまり、高校生群の母子関係の特徴は、第2段階「親が子を危険から守る親子関係(P)」が高いという中学生群の特徴に加えて、第4段階「親が子と手を切る親子関係(C)」もまた高いという点である。これら2つの母子関係の得点が、第3段階「子が困った時には親が支援する親子関係(S)」、第5段階「子が親から信頼・承認されている親子関係(T)」、第6段階「親が子を頼りにする親子関係(R)」に比べて得点が高くなっていた。

大学生群でも、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた($F(5,2660)=16.08, p<.01$)。多重比較した結果をまとめると、 $R=S>C=H>P, T>S>C=H>P$ となった。大学生群の特徴は、第6段階「親が子を頼りにする親子関係(R)」、第5段階「子が親から信頼・承認されている親子関係(T)」、第3段階「子が困った時には親が支援する親子関係(S)」が顕著になる点である。これら3つの母子関係の得点が、第1段階「親が子を抱え込む親子関係(H)」、第2段階「親が子を危険から守る親子関係(P)」、第4段階「親が子と手を切る親子関係(C)」に比べて得点が高い。

院生群でも、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた($F(5,2660)=17.44, p<.01$)。多重比較した結果をまとめると、 $R=T>C=S=H>P$ となった。院生群の特徴は、第6段階「親が子を頼りにする親子関係(R)」、第5段階「子が親から信頼・承認されている親子関係(T)」が大学生群と同じく顕著であるという点である。そして一方で、第3段階「子が困った時には親が支援する親子関係(S)」が低くなるという点である。

b. 青年期の各時期にみられる父子関係の特徴

父親との親子関係について、1.ですすでに解明された6因子の各因子得点の変化を、学校段階別にまとめて図示したものがFIGURE 2である。以下、6種類の父子関係の得点の比較を学校段階別に行った。

FIGURE 2 学校段階間にみられる父子関係の因子得点の変化

中学生群では、6種類の父子関係の得点に有意差がみられた ($F(5,2660)=5.82, p<.01$)。多重比較 ($Mse=0.71$) した結果をまとめると、 $P>H=S=C>R>T$ となる。母子関係と同様、中学生の父子関係の特徴としては、第2段階「親が子を危険から守る親子関係(P)」が顕著に現れる点がまずあげられる。

高校生群でも、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた ($F(5,2660)=3.24, p<.01$)。多重比較した結果をまとめると、 $P=C>S=T, H>T, C>R$ となる。高校生群の父子関係の特徴は、第2段階「親が子を危険から守る親子関係(P)」が高いという中学生群の特徴に加えて、第4段階「親が子と手を切る親子関係(C)」もまた顕著になるという点である。

大学生群でも、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた ($F(5,2660)=7.78, p<.01$)。多重比較した結果をまとめると、 $T>S=R>P, T>C=H$ となる。大学生群の特徴は、第5段階「子が親から信頼・承認されている親子関係(T)」が顕著になる点である。

院生群でも、6種類の親子関係の得点に有意差がみられた ($F(5,2660)=13.37, p<.01$)。多重比較した結果をまとめると、 $R=T>S=H>P, R=T>S=C, R>H>C$ となった。院生群の特徴は、第6段階「親が子を頼りにする親子関係(R)」、第5段階「子が親から信頼・承認されている親子関係(T)」という2種類の親子関係が顕著に高くなるという点である。

c. 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程

母子・父子関係について、a., b.で検討してきたことと、TABLE 4, 5の因子得点をもとにして、学校段階別に、親子関係の特徴をまとめると、次のようになる。

中学生の親子関係の特徴は、「親が子を危険から守る

親子関係」が、他の親子関係より多くみられる点である。また中学生では、「親が子を抱え込む親子関係」「親が手を切る親子関係」「子が困った時親が支援する親子関係」もかなり見られる。しかし、「親が子を頼りにする親子関係」と「子が親から信頼・承認されている親子関係」はあまりみられない。

高校生の親子関係は多様で、どの種類の親子関係が顕著にみられるといった特徴ははっきりしないが、「子が困った時には親が支援する親子関係」、「子が親から信頼・承認されている親子関係」や「親が子を頼りにする親子関係」はあまりみられない。それに比べると、「親が子を危険から守る親子関係」、「親が子と手を切る親子関係」、「親が子を抱え込む親子関係」の3種類の親子関係は多くみられる。

大学生になると、中・高校生で多くみられた「親が子を危険から守る親子関係」は、ずっと減る。そのかわり、「子が親から信頼・承認されている親子関係」がよくみられるようになる。これは、子どもを一人前になったと認め、子どもを信頼する親子関係が多くなることを表わしていると思われる。中学生と大学生の母娘関係だけに、「子が困った時に親が支援する親子関係」が顕著にみられる。母と娘は同性のため、親子間の心理的距離が近い。そのため、困ったときに娘は母に頼りやすいであろうし、母も娘には援助しやすいのではないと思われる。しかし、高校生については、親子関係の大きな変化期であることが本研究で明らかにされている。高校生では、親子関係が不安定になっていると考えられ、母娘間でも、子が困ったときに支援を受けるという関係はあまりみられないのではないかと考えられる。

さらに年齢が進んだ院生では、大学生でみられた「子が親から信頼・承認されている親子関係」とともに、「親が子を頼りにする親子関係」が多くみられるようになる。この親子関係は大学生では母娘関係のみにみられ、父子関係にはまったくみられなかったものである。ただし院生では父子・母子関係のどちらにも男子・女子に差がなく多くみられる。このことは、大学生と比べて、院生の方が心理的離乳をより果たしていることを示唆しているものといえよう。年齢とともに、青年の親子関係は、親からの支配や保護を受けるという関係から、心理的に離乳した状態と考えられる親との対等な関係へと変化していくことがうかがえる。

ところで、心理的離乳の状態から最もかけ離れた第1段階の「親が子を抱え込む親子関係」は、中学生で他の年齢の青年よりやや多くみられた。親子関係の内

FIGURE 3 親子関係のあり方の変化からみた心理的離乳への過程

容から考えても、また FIGURE 1, 2 に示された変化の様子をみても、この親子関係は、中学生以前の年齢層でさらに多くみられるのではないかと推測される。

本研究のまとめ

本研究の結果に基づき、親子関係の変化からみた心理的離乳への過程に関する考察を行い、それを図にまとめたものが FIGURE 3 である。各学校段階に多くみられる親子関係は四角形で示した（因子得点.30 以上は■；.15 以上は□）。あまりみられない親子関係は×印で示した（因子得点-.30 以下---；-.15 以下--）。それ以外の場合は空欄である。因子得点⁴は TABLE 4, 5 における全体の結果を用いた。本研究全体の論旨をまとめたこの図について、次の(1), (2), (3)の3点にまとめて述べる。

(1) 親子関係からみた心理的離乳への過程仮説

親子関係項目の因子分析結果と年齢を基準にした親子関係の発達の変化を検討した結果に基づいて、心理的離乳へ至る親子関係の変化についてまとめてみる。すでに述べたように、「親が子と手を切る親子関係」は、「親が子を抱え込む親子関係」と表裏一体の関係にあると考えることができる。そこでこの2つをあわせて第1段階としてまとめることにした。その上で、本研究の結果を総合的にみると、青年期の親子関係は、次の5段階を経過しながら、心理的離乳へと向かって発達的に変化していくと考えられる。

第1段階—親が子どもを抱え込む親子関係／親が子と手を切る親子関係

第2段階—親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係

第3段階—子どもである青年が困った時に、親が助けたり、励まして子どもを支える親子関係

係

第4段階—子どもが親から信頼・承認されている親子関係

第5段階—親が子どもを頼りにする親子関係

(2) 心理的離乳の過程でみられる親子関係の転換点

FIGURE 3 の図中に網かけして図示した2つの大きな四角形で、各年齢群にみられる特徴的な親子関係を囲んでみた。高校生の親子関係は多様である。顕著に多くみられる親子関係というものは特になく、「子が困ったときには親が支援する親子関係」があまりみられなくなることが特徴である。そして大学生になると、その時期を特徴づけるような親子関係が再びはつきりしてくる。すなわち、高校生と大学生の間で、親子関係のあり方には、質的な差異ともいえるような大きな転換が生じていることが推測される。この点についてまとめてみると、次のようになる。

中学生の親子関係で多いのは、「親が子を危険から守る親子関係」、「親が子を抱え込む親子関係」、そして「親が子と手を切る親子関係」、「子が困った時には親が支援する関係」であった。親が子を頼りにしたり、親から子が信頼されている親子関係は、中学生は自分の親との関係ではないと思っている。

大学生や院生では、中学生とはまったく逆で、自分と親との関係は、「子が親から信頼・承認されている関係」、「親が子を頼りにする関係」であると思っている。そして、「子を危険から守る親子関係」や「子を抱え込んだり子と手を切る」といった親子関係ではないと

⁴ ±.15を越える範囲では、母子関係と父子関係で因子得点の正負が逆転することはなかった。そこで、どちらかの親子関係で±.30, ±.15を越えたものを図示した。

思っている。

つまり、中学生の親子関係と大学生以降の親子関係とは対照的であり、質的な転換ともいえる大きな変化がみられるのである。この転換点となっているのは高校生の時期のようである。高校生の親子関係は、親が手を切る関係だと思っている以外は、とくにこの時期をはっきりと特徴づけるような親子関係はみられない。すなわち、高校生では親子関係に大きな転換ともいえる変化が進行していて、この時期には顕著に現れる親子関係は特にみられないのだと考えられる。

逆の「青年が自分の親子関係はそうではないと思っている親子関係」からみると、中学生と高校生は親が子を頼りにしたり信頼している関係ではないと思っている。これが大学生以後とは対照的である。この点からみると、親子関係の大きな転換は高校生から大学生の間に生じると考えられる。

(3) 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程

以上のことを考え合わせると、青年期における親子関係は、本研究のまとめの(1)で述べた5段階の順で発達の変化をとげ、心理的離乳へと向かっていく。子である青年が、「親が自分を抱え込もうとしている親子関係」や「危険から親によって守られている親子関係」を生きていると思っている状態から、「自分は親から信頼・承認され、頼りにされている」と思う状態へと変化していく。その変化の中でみられる大きな転換は、高校生から大学生のはじめの頃に生じていると考えられる。

本研究は中学生から院生までの生徒・学生を対象としていた。しかし、得られた結果から、中学生以前また院生以後に年齢範囲を広げた親子関係のあり方を推測することができる。延長した年齢の親子関係については、FIGURE 3 に()を付けて記入した。この点に関して、今後、小学生、社会人となっている青年や成人を対象にした研究が必要である。それによって、心理的

離乳の過程がより適確に解明されることになるであろう。

引用文献

- Hollingworth, L.S. 1928 The psychology of the adolescent. New York: Appleton
- 河合隼雄 1977 昔話の深層 福音館
- 西平直喜 1990 成人になること 東大出版
- 西平直喜・久世敏雄 1988 青年心理学ハンドブック 福村出版
- 落合良行 1991 心理的離乳に伴う人間不信とその克服 静岡大学教育学部研究報告・人文社会科学篇 41, 287-302.
- 落合良行 1993 親離れとはどうすることか (落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一著) 青年の心理学 有斐閣 Pp. 139-151.
- 落合良行 1995 心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究 17, 51-60.
- 田中 敏 1992 パソコン用統計分析プログラム STAR version4.0 (田中敏・山際勇一郎著) 新訂 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 教育出版
- 山田和夫 1983 成熟拒否 新曜社

付 記

本研究は、平成5・6年度文部省科学研究費補助金(一般研究C;課題番号05610089;研究代表者 落合良行)を受けて行ったものである。

この研究では、筑波大学大学院心理学研究科 国本勝正氏、同大学院教育研究科(現 熊本県立松島商業高等学校教諭)岡本政博氏、同研究科 長谷川充麻氏の協力を得た。記して謝意を表します。

(1995.10.20 受稿, 11.11 受理)